川崎医療福祉学会誌　Vol. 1　No. 1　1991

原　著

ハーディの *The Hand of Ethelberta* における女性像

橘　　智　子

川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科

（平成3年8月6日受理）

The Hand of Ethelberta

Tomoko TACHIBANA

Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(*Received on Aug. 6, 1991*)

Key words : Thomas Hardy, Ethelberta, marriage, the new woman

要　　約

『エセルバータの手』(*The Hand of Ethelberta*) でトマス・ハーディ (Thomas Hardy) はシェイクスピア風の貴族社会を風刺した軽いタッチの喜劇を書こうとしてか，副題に『数章から成る喜劇』と付加しているが，失敗作としてその評価は極めて低く，minor novel に分類されている．

しかし，ヒロイン・エセルバータは，Hardy が創造した他の女性たちより興味深くユニークな存在である．家族のために恋人を諦めて裕福な老貴族と結婚する自己犠牲的行為は，人身御供として本来ならテスの場合のように悲劇的であるが，エセルバータの場合，考えようによっては，環境の犠牲者(召使いの娘として，10人の兄弟姉妹の5番目に生まれたという)とも言えるが，彼女の自尊心及び虚栄心がらみの野心にのっとり，自ら選んだ道を邁進し，子爵夫人として夫も財産も管理・支配する姿には，悲劇よりむしろしたたかな生命力を感じる．

この小論では，19世紀の時代背景と，その思潮に触れ，ヒロインが職業(コーリング)で果し得なかった女性の自立，並びに持てる才能の開花を結婚によってどのように達成し維持していくか，彼女の生き様(ざま)を「新しい女」と位置づけ論を進めていく．

Abstract

The Hand of Ethelberta, the fifth published work of Thomas Hardy's fourteen long novels, is regarded as minor novel in every respect, especially because of his failure to make it a comedy in spite of appending the subtitle, *A comedy in Chapters*. However, the heroine Ethelberta, the daughter of a butler, is more interesting and unique than most other women in Hardy's novels. She is a woman with a man's disposition who has innate respect for the upper class. From the moment that she decides to marry a rich but old aristocrat for the sake of her poor large family, she rejects her true love, but succeeds in getting her husband as well as his estate under the control of her own hands. In addition to this, she can continue to write an epic poem which is her long cherished desire. This is, so to speak, the story of a woman's success in life.

The theme of self-sacrifice in marriage for the security of her family is very tragic in cases like Tess in *Tess of the d'Urbervilles*, but in the case of Ethelberta, even if her attempt to persuade herself to be the wife of a wealthy viscount and achieve her ambition is only a sophism, we don't feel any tragic, because she lives with her own philosophy of life and pushes it through.

I will treat, in this essay, the current ideas and background of 19th century and Ethelberta's life-style as the New Woman aiming at women's independence by marriage.

1．はじめに

Thomas Hardy（1840～1928）は1870年代からその世紀末にかけて多くの傑作を世に送り出し，イギリス文壇で偉大な小説家として高い評価を受けている．日本でも，代表作『ダーバビル家のテス』（*Tess of the d'Urbervilles*）や『日陰者ジュード』（*Jude the Obscure*）はよく知られていて幾度かハーディブームを巻き起している．しかし，Butler が Hardy を 'Prose was his trade, poetry his art'[1] と評しているように，20歳代では詩人として立つことを認められず，生活のため小説家になった経緯があり，小説を書きながらも詩人の夢は捨てなかった．そして1895年，*Jude the Obscure* を最後に詩作に転向し，58歳から88歳までの30年間に918篇の詩を８巻の詩集に収めて世に問うた．その結果，20世紀のイギリス現代詩人としてその名をつらね，W. B. Yeats（1865～1939），T. S. Eliot（1888～1965），G. M. Hopkins（1844～1889）等と並び賞される優れた詩人として名声を博している．

Hardy は小説においてもまた詩の分野でも，中心テーマとして執拗に男と女，性，愛そして結婚にこだわり続けた．しかもそれらを甘美なロマンスに包まず，人間の悲哀と苦悩を極めてリアルに摘出して開示する．とくに女性心理の微妙な揺れを描くことにおいて優れている．

この小論で取り上げる作品は Hardy の初期のもので，14篇の長篇小説の５作目に当たる『エセルバータの手』（*The hand of Ethelberta*, 1876）である．この作品は，Hardy 自身「序文」で 'somewhat frivolous narration was produced as interlude between stories of a more sober design'[2] と断っているが，前作で好評を得た田園小説『狂おしき群をはなれて』（*Far from the Madding Crowd*, 1874）と，次作の傑作『帰郷』（*The Return of The Native*, 1878）の狭間の埋め草的なものとして書かれ，新婚間もない生活費を稼ぐつもりで世に出したものと思われる．しかし「序文」によると当時の読者や批評家たちから失敗作として酷評を受けたようである[3]．

Hardy はこれまでの田園小説から，都市に流入し，そこで暮らさざるを得ない大衆の生活激変の片鱗を実験小説的に記述し，近代社会にお

ける権力構造の変化とそれに適応していく人々の過渡期の社会風刺を喜劇風に描こうとしたのか，この作品の副題に『数章から成る喜劇』(*A Comedy in Chapters*) と付記している．しかし，

The novel is subtitled 'A Comedy in Chapters', but in spite of some resolute attempts at witty dialogue, humorous situation and epigrammatic comment, one's reflection on closing the book is that *Hady's pursuit of the comic spirit is somewhat less than half-hearted*[4].

(Italic mine)

と Norman Page が辛辣に指摘しているように，確かに35章と43章から47章に笑劇とも言えるドタバタ喜劇が展開されるだけで，登場人物の思考と言動が外面的には愚かしさ故に喜劇的で，内面的にはその愚かな苦悩故に悲劇的でさえある．「数章」を「数章に限って」と言うべきであろうか．しかしこれを演劇として上演すれば，その舞台まわしの早いテンポと，意外な展開のうねりの高低起伏と，ヒロイン・エセルバータを巡る4人の求婚者を含め，キャラクターの多彩さ，オールスターの出番の多さと出入りの激しさ，時々に合わせて幻想的な雰囲気と謎ときなど雑多に工夫され，世の転換期に肩を寄せ合って生き抜く家族愛や，一幕毎に行手の障害を次々に除去して目標を達成するヒロインの成功物語としては充分な喝采が得られ，さらにフィナーレを女権の拡張と辣腕発揮に焦点をあてて演出すれば，Bernard Show 風の活気あふれる喜劇として成功していたかも知れない．

ともあれ，田舎に生まれ育ち，田園小説で世に出た Hardy が，何よりも生活費を稼がなければならなかった時，小説としてだけでなく演劇脚本としても売れる可能性を願い，かつ純文学作家が大衆小説のジャンルに思いを致し，時事に則し意識的に軽く面白くと意図して創作した作品だと思われる．時に英国の中間・下層階級でも，大衆小説と通俗・廉価な新聞雑誌が大量に商業化され商品として流通する時期であり，文才ある者がまた財を成す事と符合する．

自然並びに風景の（時々刻々の光と影のうつろい，そして遠近法を駆使しての）情景描写では，当代一流の Hardy が田園から都市へ，庶民社会のみならず（没落していく）貴族社会，また（崩壊する）封建性から近代性へと，その創作の領域を拡げて行ったこと，すなわちこの作品の完成を通して Hardy 自身の認識と体験の世界の拡大があり，その後の作家活動のスプリングボードとなった労作だと位置づけたい．前述したように，この作品は世評では失敗作とされ，'minor novel' に分類されているが，ヒロイン・エセルバータの個性は Hardy が描いた他の女性たちとは異なっていて興味深い．この点を，V. R. Hyman が 'In many ways, Ethelberta is a parody of the conventional heroines'[5] と指摘している．それに一部分ではあるが，現代のフェミニズムに通じる気脈や，貴族社会から階級社会へと移行するプロセスとそれに付随する諸問題を意識的に織り込んでいて当時の社会現象と世俗を推察する資料としても貴重である．

この物語は愛と結婚それに才気ある「新しい女」の野心を横軸に，封建性と近代性，それに階級制度の弛緩と混沌を縦軸に絡らみ合わせ，さらに家族と個人，ラブロマンスと社会風刺を前後軸にして，立体的に動的に展開していく．

Hardy は女性が結婚を決意する環境と心情をどの作品の中でも描写しているが，エセルバータの場合は大層ユニークである．彼女は愛を捨て，自らの野心を暖め自尊を選び，それを達成するための条件を満たす結婚を希求して悪戦苦闘して行く．

現代では程度の差こそあれ，女性も野心を語る時代となった．また，結婚の条件を生生と主張出来るし，打算すら口をついて出て，一部マスコミはその無定見な露悪化をあおっている．前世紀末，そしてポストモダン・フェニズムの今世紀末，ともに野心と打算の時代的潮流にあっては，それを Hardy がこの作品のように扱うと却って当時の批評家から反発を招くのかも知れない．では，この小説のプロットの紹介から論を進めて行きたい．

Hardy は物語の当初から，ヒロイン・エセルバータ（21歳）を，貴族の未亡人として登場さ

せ，彼女の将来と，この物語の全容を象徴する劇的な暗示を設定する．それは，野ガモがタカに襲われて，あわやタカの餌食にされると思われた瞬間，その都度巧く逃れて生きのびるシーンである．ここで Hardy は，野ガモにエセルバータの全智全能，および下層階級を，タカにエセルバータのその才能を圧殺しようとする外部環境の苛酷さ，および貴族階級を象徴し，最後には弱肉強食の苦難に打ち勝って，彼女が自立して行くことを示唆している．

Hardy はエセルバータを，'She was the daughter of a gentleman who lived in a large house not his own' (p 33) と，あいまいな紹介をしているが，要するに貴族の大邸宅に住み込んでいる執事チッカレル(Chikerel)の娘である．天性の美貌と才気煥発と怜悧さで，18歳から準ナイト爵，ラルフ・ペサウイン卿(Sir Ralph Petherwin)の虚弱な娘の家庭教師として住み込むが，そこの跡継ぎ息子と恋をし，駆け落ち結婚する．しかし，すぐに若い夫は病死し，ついでラルフ卿も他界したために，姑のレディ・ペサウイン (Lady Petherwin) は彼女をボンに連れて行き，数年みっちり教育を受けさせ，上流社会に通用する女性に磨き上げ，貴族の未亡人として母国に帰り社交界にデビューする．勿論，身元とか素性は秘密にし，肉親とも会わないという条件付きであった．このような事情と制約は当然ながら日常生活においても情緒不安定となり，時に深層では強迫観念を生じ罪悪感につながって，彼女に不自由さと不自然さがつきまとうことになる．この状況の中から，エセルバータは「詩集」を出版して一躍社交界のスターダムにのし上がる．しかし，これらの恋愛詩が姑の目にとまり逆鱗に触れ，若い未亡人の貞節観念までおとしめられて不和になる．それから2年後に姑が死去した時，財産は全然もらえず，当時住んでいたロンドンの家だけが残されたが，それとて2年の期限付きの借家契約権でしかなく，継続する場合は，年300ポンドを支払わねばならなかった．彼女は生計を立てるため，女流詩人の立場を最大限に利用して，プロの語り手となり朗読会を開き，合わせて高級下宿屋を経営して収入を得る．しかし，斬新な職場を開拓したかに見えた朗読会もやがて下火になり，その上，借家の返還期限が迫って来て彼女の生活不安が焦眉のこととなり，その打開策として結婚を考えるようになる．彼女には4人の求婚者がいる．作曲家で，教会のオルガン弾きのクリストファ・ジュリアン (Christopher Julian) 27歳，新進画家のレディウエル(Ladywell) 25歳，地主でクラブ経営者のネイ(Neigh) 35歳，そして大荘園と資産を持つ貴族のマウントクレア卿 (Lord Mountclere) 60歳である．エセルバータが本当に愛したのはクリストファだけであったが，彼の家は没落して財産がないため彼女の結婚の対象にはならず，また妹が彼を愛しているのを知り諦める．そして，レディウエルもネイも拒絶して，好色で老齢のマウントクレア卿と結婚すると，万事を自分の支配下に置き子爵夫人として，たくましくしたたかに生きて行くことになる．良し悪しは別として，言わば女の出世物語である．しかし，何故彼女が愛を捨て，野心に生きる成り行きになったのか．先づこの時代的，思想的背景に触れてみたい．

2．時代背景

久しく続いた家内工業の時代では，田舎でも都市でも職人は働いて食べて飲んで眠る間中，まる24時間職人であり，厳格な徒弟関係と封建社会の身分制度の中で労働を集約して，親方と職人の家族の生活が営まれていた．現にエセルバータと共に近代都市ロンドンの活気に触れている兄達2人も，田舎では昔ながらの年中無休の長時間労働に従事していたことが描写されている．しかし，都市に生産設備と資本が投下され，新興ブルジョアジーが勃興続出すると共に職人も組合を組織し，僅かの年休と，9時間制労働の職人として生活するようになった．しかし，一方ではかつて貴族の家柄であり，知識階級のクリストファが，今では妹を助手に，舞踏会の楽士として一晩中演奏して，特別の厚情で2ギニー（2ポンド2シリング）の謝礼を受け取るような現象も見られた．このような世相をHardy はマウントクレア卿に次のように代弁させている．

Modern developments have shaken up the classes like peas in a hopper. An annuity, and a comfortable cottage..../ Manufacture is the single vocation in which a man' prospects may be illimitable. Hee-hee!....they may buy up before they die! (p 297)

つまり，上流，中流，下層階級，それに産業革命の落し子である新しい階級が加わり，まさに階級激変の様相を帯び始めていたことを示唆している．そして労働者の待遇改善のため，年金制度などが発議され豊かになる下層階級を望見すると同時に，他方貴族社会の衰退を暗示している．

一方思想的にも，19世紀末を控え新旧交替のこんとんとした現象を露呈していた．すなわち従来の福音主義を中心とする因習的な思想に反対して，ダーウィンの『種の起源』(1859)，J. S. ミルの『自由論』(1859)，『婦人解放』(1869)，マッシュウ・アーノルドの『教養と無秩序』(1869) などが刊行され，自由思想や婦人解放運動が起っていた．ノルウェーの詩人・劇作家ヘンリック・イブセン (Henrik Ibsen (1828～1906)) によって書かれた『人形の家』(*Et dukkehtem*) のヒロイン・ノラが「妻であり母である前に一個人の人間として生きたい」と夫の許を去る戯曲が，イギリスでも *A Doll's House* という題名で翻訳上演された．これが婦人解放の種火となり，賛否両論の中でノラは一躍 'the new woman'「新しい女」となった．イギリスでは1870年から1900年の30年間，女性解放の真の時代と呼ばれているこの時期に，「新しい女」をうたう新思想にのっとり，Charlotte Brontë, George Eliot, Meredith, George Gissing, More, Thomas Hardy の作家たちは，こぞって「新しい女」を作品の中で創造し，世に送り出したのである．

3．エセルバータ像

Hardy は「新しい女」の傾向と実在を描こうと，多くの女性像を創造したが，その代表的ヒロインは，Elfride, Bathsheba, Ethelberta, Eustacia, Grace, Tess, Sue などである．しかし知的で「新しい女」は Sue と Ethelberta の２人だけである．大方の批評家や読者は，スーは「新しい女」と認めながらも，エセルバータを「新しい女」に位置づけていない．しかし，スーの原形はエセルバータであり，「新しい女」の先駆者と言えよう．ではエセルバータの女性像を分析紹介しながらこの小論を進めてきたい．

The two absent brothers and two absent sisters — eldest members of the family — completed the round ten whom Mrs Chickerel with thoughtless readiness had presented to a crowded world,.... (p 123)

とあるようにエセルバータは10人兄弟姉妹の５番目で，弟妹の面倒を見る立場に置かれている．ペサウイン夫人として上流社会入りした彼女は一度は肉親たちと縁を切ったが，姑の死後関係は復活し，チッカレル家の経済援助をして子供たちを養育する義務を感じ，背椎カリエスの母親と５人の弟妹を田舎からロンドンに連れて来る．兄たちも田舎からロンドンの職人となり，姉２人も下宿屋をするにあたって，女中と料理人として呼び寄せ，貴族の邸で執事をしている父親を含め一家がロンドンに集まることになる．勿論世間には秘密の関係である．しかしエセルバータが，'It is my duty, at all risk and all sacrifice of sentiment, to educate and provide for them (=her younger brother and sisters)' (p 136)と言っているように，何故自分の感情を犠牲にして，身分露見の危険をおかしてまで子供たちを養育しなければならなかったのか理解に苦しむところである．と言うのも，父親はドンカースル家の執事として 'the remmeration was actually greater than in professions ten times' (p 213)と，良い仕事に就いている人の10倍の収入があり，２人の兄と２人の姉は働いていて，家族が力を合わせていけば，一家の生活は成り立つ筈である．Hardy は彼女の家族思いに女の自尊心，虚栄を絡ませて物語のプロットを複雑にする．つまり，一度上流社会の華やかな雰囲気を味わったヒロインには下層階級に逆行して貧困と生活不安にあえぐことには耐えら

れないのである．'We must not be poor in London. Povery in the country is a sadness, but poverty in town is a horror' (p 179)と，妹に言っていることからもこの点は推察出来る．そして，中味は下層階級，外面は上流階級といういつ剝げるかも知れないめっき張りの不安定な状態の中で，彼女の心は二つに引き裂かれて苦悩する．Hardy は終始一貫して，エセルバータをこの両極に振幅させ，微妙に揺れる女性心理の陰影を見事に描いている．例えば，弟妹たちの犠牲になるのを甘受しようと決意しながら，

If God Almighty had only killed off three - quarters of us when we were little, a body might have done something for the rest ; but as we are, it is hopeless! (p 314)

と，10人の子供の3/4を全能の神が殺していてくれたらとも愚痴を言い．また 'Experimentally, I care to succeed in society ; but at the bottom of my heart, I don't care' (p 136)と言ってみたり，果ては，次のように精神の重圧に堪えかねて，胸中の苦悩を吐露している．

I am sick of ambition. My only longing now is to fly from society altogether, and go to any hovel on earth where I could be at peace (p 282)
I cannot endure this kind of existence any longer. I sleep at night as if I had committed a murder ; I start up and see processions of people, audiences, battalions of lovers obtained under false pretences — all denouncing me with the finger of ridicule. (p 282)

つまり，彼女は野心を捨てて，安らぎを求めながら，そうすることも出来ず，虚偽の生活で世間をあざむいているとの恐怖が罪悪感をともなって，殺人を犯したような気持で夜眠ると訴えている．もう一例は，彼女がコーヴィスゲイト城での王室考古学会の集まりに，馬車を雇う費用を惜んで，ロバで出掛けた時の出来事である．つないでおいたロバを，エセルバータが乗って来たとは思いもかけない貴族たちが寄ってたかって，老いぼれているとか，みすぼらしいとか嘲笑しているのを見て，彼女のプライドがロバを無視する．

The ass looked at Ethelberta as though he would say, 'Why don't you own me, after safely bringing you over those weary hills? But the pride and emulation which had made her what she was would not permit her, as the most lovely woman there, to take upon her own shoulders the ridicule that had already been cast upon the ass. (p 242)

どうして自分のものだと認めてくれないのかと言いたげなロバの眼差(まなざ)しは，彼女の良心の声であるが，プライドと虚栄がその考を打消してロバを拒絶する．しかし，父親の職業や自分の身の上に思いを至す時，その矛盾に気づき，深く恥じ入り，心の中で 'My God, what a thing am I!' (p 242)と叫ぶ彼女でもある．
H. C. ダフィンは，エセルバータを評して「彼女には冷たい打算的な理性以外ほとんど発見出来ない．情熱については何の暗示もなく，彼女のかすかな光のない情緒の輝きは，その議論づくめの人生計画という冷たい注水によってたちまち消される」[6] と言っているが，これは誤解である．L. A. Björk はエセルバータを次のように見ている．

She is practical but sensitive, socially ambitious yet in love with a poet and sensitive to the need of her family. Conscious that *she can move in either direction*, Ethelberta ultimately opts for *social ascent*, which means in this case, *ethical decline*.[7]

(Italic mine)

彼女は悪女振る部分もあり，自己中心的で気紛れで虚栄心が強い女性ではあるが，根は正直で，心優しく非常に感じ易いのである．彼女が選択する余地があるのに 'social ascent' を選んだのは 'ethical decline'とか，ethical growth が見られないとか言うのは酷だと思う．彼女なりの

価値観に基づき，自分の感情を殺して，家族を幸福にすることを義務だと割り切って，目標を達成して行く意志の強さは，虚栄心が相乗効果をうながすとは言え，ヒロインの情動の力とその持続とも言えよう．人にはそれぞれの生き様があることをクリストファの妹が兄の考え方を正すシーンで引用してみよう．

Perhaps *what seems so bad to you falls lightly on her mind .... A title will turn troubles into romances*, and she will shine as an interesting viscountess in spite of them (=troubles) (p 318) (Itlic mine)

とか，エセルバータが老貴族と結婚したことで，彼女を責める兄に向って，'A coronet covers a multitude of sins' (p 318)と言っているように当時の社会通念からすれば，貴族と結婚出来る機会は，望外の幸運であったようだ．

エセルバータ像は次の「結婚観」の中でもとらえて行きたい．

4．結　婚　観

エセルバータは，経済的にも精神的にも行きづまり，詩人として，語り手として自分の才能を伸ばし，且つ経済的に支えてくれる男性との結婚を思い付くと，自己犠牲に見合うだけの利益をもたらす価値ある結婚に向けてあらゆる手段を駆使するのである．そして

We shall have to receive him (=Lord Mountclere), and make the most of him, for I have altered my plans since I was last in Knollsea. (p 287)

とマウントクレア卿との結婚を決意し，下層階級の出身であると告白する．ここで Hardy はエセルバータの結婚観を代弁して次のように言っている．

What she contemplated was not meanly to ensnare a husband just to provide incomes for her and family, but to find *some man she might respect*, who would maintain her in such a stage of comfort as should, by *setting her mind free from temporal anxiety, enable her to further organize her talent,* and *provide incomes for them herself*. (p 212)

(Italic mine)

これは，自分の家族に利益をもたらす結婚と言えば，卑劣な手段で男性をだまし財産を奪う悪い印象を読者に与えるのを恐れてのことだろう．そこで条件として尊敬出来る男性，彼女を雑事から解放し，彼女の才能を伸ばしてくれる男性．そして，自分の能力によって収入を得て実家の家族を扶養していけるようにしてくれる男性を見付けることとしている．つまり結婚しても，夫に隷属することなく，経済的にも精神的にも自立していける環境と安定を保証してくれる結婚ということになり，現在のフェミニズムに一脈通じるものがある．

借家を返却したら行くあてもなく，男性にはそれぞれ求婚の返事を迫られている中で，老齢のマウントクレア卿を選んだのは，貴族であることを優先し，彼女とその一族の将来の安定を計るための選択であったのだろう，と同時に loveless marriage に踏切る冷静な決意と，福祉国家模索途上（新救貧法，1834年）のイギリス下層階級の恐るべき苦難とすさまじい貧困の実態を彼女が片時も忘れ得なかったためであろう．そして若い求婚者たちには，彼女なりの洞察力を働かせている．そのことは，

....how few these were may be inferred from her opinion, true or false, that two words about spigot on her escutcheon would sweep her lovers' affections to the antipodes. (p 280)

と説明しているように，執事の娘と分かれば恋人たち（ネイとレディウエル）の愛情も冷め，さげすまれるだろうとの思いが働いたことも事実であろう．'If you (=Neigh or Ladywell) only knew all!' (p 198) とか，'I wish there were no different ranks in the world' (p 199)と言っていることからも明白である．

前述したように Hardy は，エセルバータを常に二者択一の状態に置き，彼女の複雑な多面性を浮彫りにして心理葛藤の綾を描き出しているが，ここでも今一度，二者の狭間で揺れ悩む彼女である．

There lay open to her two directions in which to move. She might annex herself to the easy-going high by wedding an old nobleman, or she might join for good and all the easy-going low, by plunging back to the level of her family, giving up all her ambitions for them, setting as the wife of a provincial music-master named Julian.... (p 279)

このように，彼女には老貴族との結婚による 'the easy-going high' にも，貧しくとも愛するジュリアンとの 'the easy-going low' にもそれなりの魅力と価値があったのである．そして結果的には，

Ethelberta is forced to curb her own passions for the responsibility she feeds for her destitute family when, having realized that her own earnings will not suffice to maintain her relatives. She faces the opportunity of relieving their situation by a financially rewarding marriage. (p 279)

家族を養う責任を優先させ 'a financially rewarding marriage' を選び，'never before in her life had she treated in such a terribly cool and cynical spirit as she had done that day' (p 279)とマウントクレア卿との結婚を冷静に受けとめ，'I shall think it a great honour to be your wife' (p 297)と言うのである．あなたの妻になるのは「光栄」だと言うところに彼女の love への決別と 'loveless, passionless marriage' に対するしたたかな割り切り方を伺わせる．また，マウントクレア卿の方は 'It becomes a lady to make a virtue of a necessity'. (p 383)と，'loveless marriage' を納得の上で妻に迎えており，'Your beauty, dearest, covers everything!' (p 383)と言う卿の言葉と 'A Coronet Covers a multitude of sins' と言う彼女の言葉が二人の今後の結婚生活をアイロニカルに暗示しているようだ．

5．む す び

このように物語を概観してみると，*The Hand of Ethelberta* の "Hand" の意味は，R. Gitting の解釈通り "Hand" in marriage と Playing of her "hand"[8] つまり「結婚」と「何らかの手段と段取り」を用いて全力を尽くすことであることが分かった．この他，「手練手管」「支配力」「手腕」「妙手」などの意味もここではあてはまるだろう．

最終章で 'She got to be my lord and my lady both' (p 387)と領民が言っているように，エセルバータは「領主」と「奥方」の二役を立派に果たす「管理能力」と「権威」を握ったのである．彼女は結婚すると直ちに夫の愛人を邸内から追い出し，次に会計・記帳を覚え，無能な使用人を大幅に整理し，伐採した木々に印をつけ土地の管理や馬の売買など経営の業務から家事万端の遣り繰りに至るまで完全に習得しその「手腕」を振い，加えて自分の才能をのばすべく叙事詩の習作を続けている．ここに到達するまでの苦労は身分違いの結婚だけに並大低のものではなかったであろうが，彼女は耐え抜いて新しい境地を切り開いていったのだ．父親はこのように娘を語っている．

But *she stood her ground.* She was put upon her mettle ; and one by one they got feel there was somebody among them *whose little finger,* if they insulted her, *was thicker than a Mountelere's loins.* She must have had *a will of iron* ; (p 390) (Italic mine)

まさに「鉄の意志」を持ったヒロインは夫よりも人望があり尊敬されるようになった．そして毎週教会に行かせ，家庭祈禱書を読ませて夫の精神浄化を計り，酒を制限して健康管理をする．しかし妻の言うがままに行動する彼に同情してか，はたまた女性に対する皮肉からか，'Tis sad

condition for one who ruled womankind as he, that *a woman should lead him in* a string whether he will or no'.(p 388) (Italic mine) とも言っているが，あるいは，実務に精通し，管理職をこなしうるキャリアウーマンの出現及び男性社会の弊害を矯正しうる女性の出現を予言しているのかも知れない．従ってエセルバータを「新しい女」の先駆者の末席に加えるのは妥当であろう．unhappy ending で終ることが多い Hardy の作品では珍らしく happy ending であるが，エセルバータ自身が happy なのか unhappy なのか，Hardy はあれ程しゃべり続けて来た彼女に結婚後一言も語らせていないのは全く不思議である．大荘園のロッジの門が開かれ，制服着用の若い従者を警護に同乗させ，エセルバータが四輪馬車で駆けて行く後姿だけを見せるこのシーンで，クリストファは彼女への愛が終ったことを心に確かめ，永遠の別離を告げて，妹のピコティに結婚を申し込む．しかしエセルバータは彼女の結婚後の心理が全然描写されていないだけに，遠ざかって行く彼女の後姿をどのよう読めばよいのか．love を捨て，ambition に生き，敢然と運命に立ち向かった 'a will of iron' の女性の本音と行く末は，読者それぞれの思惟と imagination にと，あえて突き放す Hardy 独特のテクニックであろうか．ともあれ私は彼女が過去(うしろ)を振り向かず，性役割から解放され，精神的・経済的自立を目指して，さっそうと駆ける「新しい女」を見る思いがするのである．

文　　献

1) Lance St. John Butler (1977) *Thomas Hardy After Fifty Years.* The Macmillan Press Ltd, London, p 49.

2) Thomas Hardy (1975) *The Hand of Ethelberta.* The Macmillan Press Ltd, London, p 31.

3) Ibid., p 31.
On its first appearance the novel suffered, perhaps deservedly, for what was involved in these intentions — for its quality of unexpectedness in particular....
この text からの引用は，以後，引用文の末尾のかっこ内にページ数を記入する．

4) Norman Page (1977) *Thomas Hardy.* Routledge & Kegan Paul Ltd, London, p 98.

5) Virginia R. Hyman (1975) *Ethical Perspective in the Novels of Thomas Hardy.* Kennikat Press Corp, Port Washington, N. Y./London, p 54.

6) H. C. ダフィン（山本文之助訳）(1966)『トマス・ハーディ論』．千城出版社，東京，p 176.

7) L. A. Björk (1987) *Psychological vision and social Criticism in The Novels of Thomas Hardy.* Almqvist & Wiksell International stockholm, Sweden, p 93.

8) R. Gitting (1975) *Young Thomas Hardy.* Heinemann Educational Books Ltd, London, p 206.